

半導体漫遊記

(355)

湯之上隆

オランダの露光装置メーカーのASMLは10月16日、2024年第3四半期(Q3)の決算を発表した。ところが「技術的なエラー」により、1日前の15日に決算報告書がリリースされてしまい、その業績が期待外れだったため、実際の決算日の16日にASMLの株価は暴落した。

そして、これに引きずられるように東京エレクトロンやレーザテックなどの半導体関連の株価が急落し、東京株式市場で日経平均株価は大幅反落して、前日からの下げ幅は一時800円を超えた。このようにして株式市場には「ASMLショック」が広がった(日経新聞10月16日)。

問題視している。しかし、これが「ASMLショック」を引き起こすほどの大問題なのだろうか? 筆者は証券会社のアナリストではなく、従ってその道の素人ではあるが、どうも株式市場は必要以上に過剰反応しているように思えてならない。

24年Q1(36・1億円)にかけて約60%も減少している。こちらの方がより大きな問題ではないのか? しかし筆者は、22年Q3から24年Q1の間に「ASML大ショック」という記事を見た記憶が無い。従って、今回の24年Q2からQ3にかけてのみ「ASMLショック」と大騒ぎする理由がよく分からない。

なぜそうなるかを考えてみると、ASMLに受注残として積み上がっているか、半導体メーカーが導入を後ろ倒しにしたか、あるいはキャンセルしたかなどの理由が挙げられる。要するに露光装置を受注したからと言って、それが必ず売上高につながるという訳ではないのである。

2からQ3にかけて受注額が半減したことを「ASMLショック」と騒ぎ立てるのは明らかに過剰反応と言える。もしかしたら「技術的なエラー」によって、1

日前に決算報告書がリリースされてしまったことの方が問題だったのかもしれない。(微細加工研究所・所長)

受注額半減「ASMLショック」 株式市場は過剰反応か

以下はその根拠を示す。図1に示したASMLの受注額の挙動を見てみると、確かに受注額は24年Q2(55・7億円)からQ3(26・3億円)にかけて約50%減少した。しかし、これが大問題というなら22年Q3(89・2億円)から23年Q3(26億円)にかけて約70%も受注額が急減し、さらに23年Q4(91・9億円)か

い。以下はその根拠を示す。図1に示したASMLの受注額の挙動を見てみると、確かに受注額は24年Q2(55・7億円)からQ3(26・3億円)にかけて約50%減少した。しかし、これが大問題というなら22年Q3(89・2億円)から23年Q3(26億円)にかけて約70%も受注額が急減し、さらに23年Q4(91・9億円)か

だが、その影響としては売上高が23年Q4(56・8億円)から24年Q1(39・7億円)にかけて約30%の減少したことに留まっている。つまり半年〜1年前に受注額が大きく減少しているも、その後の売上高はそれほど深刻に減少していないのである。

以上のような定量分析を行ってみると、今回24年Q

以上のような定量分析を行ってみると、今回24年Q

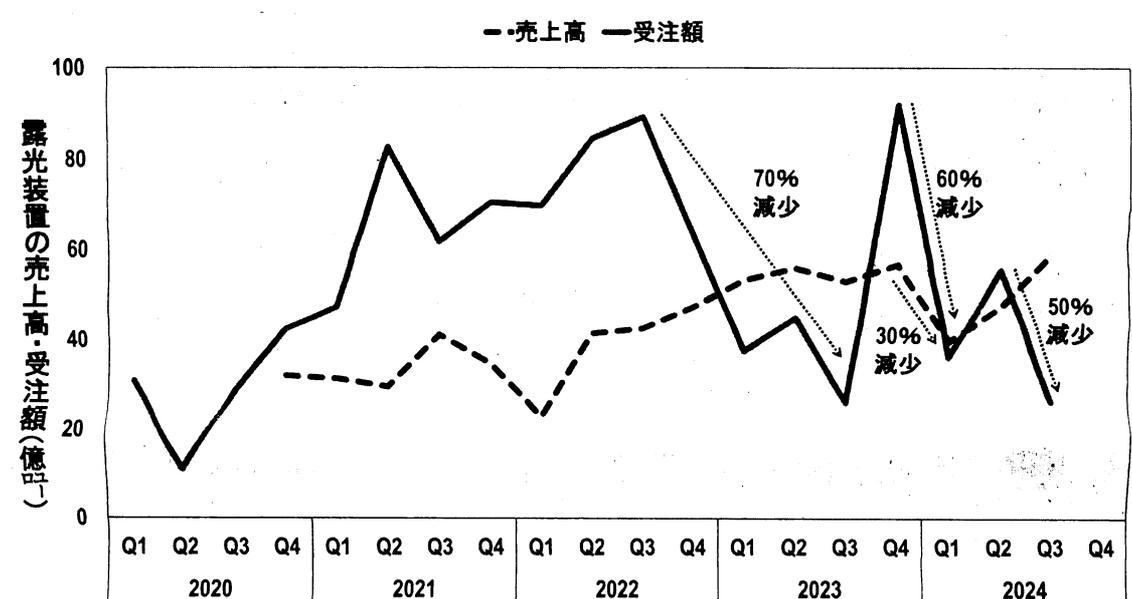


図1 ASMLの露光装置の売上高と受注額

出所: ASMLの決算報告のデータを基に筆者作成

(C) 2024 Takashi Yunogami